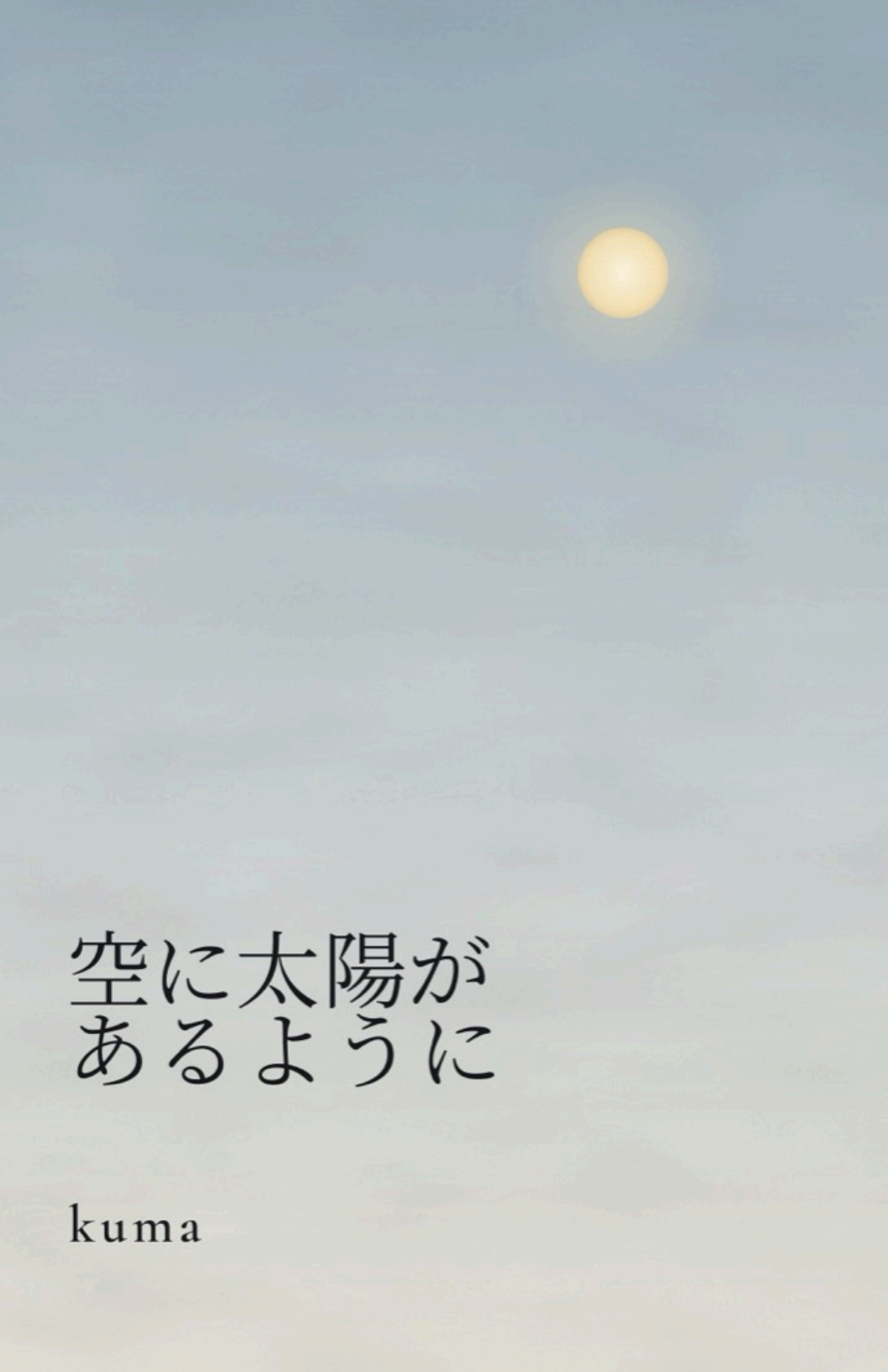

空に太陽が
あるように
kuma

空に太陽があるように

kuma

空に太陽があるように

小説

© kuma 2026
無断転載・複製を禁じます

フランス語からの翻訳
原題　comme le soleil dans le ciel

www.kumado.net
version : 261111

01 帰って

⁖⁝ ⁖⁖⁖⁘

鳥は夜明けに歌う
世界は
思い出されなくてはならないから

歌う
夜を渡ってきたから

歌う
世界が知るように
忘れられていないと



おまえの夢
おまえに何の用だ

わかってるのか
それとも話をつくろってるのか

「ꓘ」ふるう

腰掛けがぐらつく
それがいい

こいつも
耐えてきた

膝の上に
灰色の笛
使われずにきた色だ

もう長いこと

椿油を二滴
鹿の革を一枚
力をこめた
いやらしいひと拭き

　　悪い笛は嘘をつく

すぐにわかる
二つ目の音を
待つまでもない

拒まない
傷つけない
こびる

偽の笛を吹いたまま
一生を過ごすこともできる

明かりに透かして
音を化粧してきた
細工を見つける

だから置く
ここでのわずかな時間を
かける価値もない笛たちと
同じ隅に

⁂

次のは醜い
つくりも雑
つぎ直しもへたくそだ

農家の小僧の
仕事だ

思わず吹いてみる

こいつには
蜂蜜とれもんが
ひとさじ要る

それなのに
ごまかしがない

聴いてしまう

いい笛には
けっしてならない
それでも
見せかけずに
ものを言う

もっと低く吹く

音がついてくる

ゆるがない

歌うすべを知らないのに
白状するから
信じてしまう
ああいう声のように

裏を返す

この笛は
愛されてきた

おまけに
いい匂いがする

こいつなら
救える

ɔ:
　　なぜ帰ってきた
　　よろけ鳥
ɔ:

三十年
帰らなかった
おれの育った町に

灰色の川の町

「ᗰᗪᕼ」戻る

岸に沿って歩く

三階の手すり越しに
太りすぎた猫が
おれを見くだす

　おや
　走りまわる野ねずみか

　出ていって
　正しかったかどうか
　たしかめに来たのか

　いいさ
　わかったわかった
　おまえが正しかったよ

　こっちも
　おまえがいなくて
　寂しくなんかなかった

⁘

春の行列の大旗が
金持ちの通りに垂れている

別の町で
歩調を合わせて歩いた
高地の猟兵として
選りぬきの
旗手として

匂いのする通りを渡る

子どもが桶をひっくり返す
水が
靴底へ走ってきて
退屈の記憶を
連れてくる

石畳では
膝をかばって
よけいに足を引きずる

音をたてずに
子どもの水たまりへ
唾を吐く

「ς ϖ」答える

五年前から
同じ夢に呼ばれている

夢はしつこい

　　誰が呼ぶのか
　　誰のために

　　呼びつけか
　　助けを呼ぶ声か

ゆっくりと
その場で回りつづける
水

夢は戻ってくる

何日ものあいだ
その味が残る

⁘

泉へ向かって
歩く

川の水が
漏れたように
湧き出すところ

⁘

異郷暮らしが長びくと
過去は消えない

はがれてくる

しまいには
すべて作り話だったのではと
思うようになった

⁘

帰ってきたのは
むろん
自分をおだてるためだ

だが呼んでいるのは
泉だ

時をとらえる
その輪

人を洗う
澄んだ水

人の時間など
気にもとめず
そこにある

「ΦΨ」吹き鳴らす

公園のはずれに
建築現場

巨大な骨組み

むき出しの木が
昔ながらに刻まれている

壁はまだない
骨だけだ

焚き火が
端材を食っている

煙の匂いがあまりに良くて
香水がわりに
まといたいほどだ

これほどの現場なら
職人の大軍がいて
よさそうなものだ

ほとんど誰もいない

休憩なのだろう

上から
笛の音が降りてくる

誰かが鳥を真似ている
悪くない

鳥が答える

鳥笛なら
いつも首に下げている

笛がまた鳴る
鳥が答える

おれも

もっとうまく

沈黙

　　手を放せ

空の滑車が
駆け下り
ぴたりと止まる

額の高さで

木がぶつかる

上で怒鳴っている

　　止めろ
　　止めろ
　　止めろ

男が身を乗り出す

　　どこの煮えたなすが
　　おろしの合図を鳴らした

目を上げる

男はおれを見て
察する

木の上の鳥を
指さす

男は指の先を追う

おれを見る

子どもには禁じられている
手ぶりをしてみせる

栄光だ

「ζζ」巡る

公園の裏に
墓地

入ったことは一度もない

空気はひんやりして

音はくぐもっている

死者たちが
かーてんのかげから
うかがっているかのように

島では
墓は
海の岩だ

ここでは大理石の塊が
段に刻まれている

墓碑銘はない

名がひとつ

裏には
下の名
赤いろうで埋めたものもある

どの墓にも
箱がついている

鍵のない
大きな郵便受けだ

ɔ:

　土をかけば
　石が出る

　石をかけば
　夕暮れが出る

　　石を置いたのは誰
　　花だ

　　花の下には
　　何がある

　　土だ
　　土だ

mir di sar : どの手のひらも水を受ける

ɔ:

⁘

最初の箱を開ける

波打った紙の下に
乳歯がひとつ

薄すぎて
抜け殻かと思う紙もある

丁寧な字

›

　　息子はあなたに似ている
　　欠点まで全部

‹

別の箱
手本を写しただけの
空っぽの文句

それでも
痛みだけは透けている

別の紙には
材料の書きつけ
いちばん下に

›

　　いつものように
　　あなたが正しかった
　　玉ねぎのことは

‹

落ち着かなくなるものもある

›
　わたしたちの宿に
　残りたかった
　あなたの好きな言葉を
　あたためる言葉を
　書きたかった

　できなかった
　いまはもう
　何も感じない
‹

·らぐ·だ

「ՈԿ」歌う

歌が立ちのぼる
墓のあいだから

女たちの声

小さな女の子から
おばあさんまで

渦を巻く節
沸き淵の渦のように

ɔ:
　声もなく
　あの人は行ってしまった
ɔ:

歌が喉をつかむ

　紡ぎ手たちだ

離れたまま
病んだ幹のかげにいる

女たちは遠ざかる

若い娘の声

　どうしても信じられない
　あの人がこの歌を
　わたしたちの歳で書いたなんて

群れの中に
見おぼえのある顔
歌をひきいる女だ
小さな女の子の手をひいている
墓碑の名を
読みに行く
文字が薄れている
　　·ヴぃーヴる·
生きる
読み直す
　　·ヴぃーヴ·
ありふれた言葉
めずらしい名
　　·ヴぃーヴ·
どこかの手が
鳥という鳥のくちばしを
ふさぐ
生まれた年
おれと同じ
死んだ年
読み直す
数える
間違える
数え直す
　　二十四
·ヴぃーヴ·は死んだ
　　二十四で
初めての笛を
直していた年だ
それを大事なことだと
思っていた

ɔ:
　　声もなく
　　あの人は行ってしまった
ɔ:
喉をつかんだ
あの歌
　　おまえが書くのを見た
石に手を置く
冷たい
手を引く
許しもなく
触れてしまったかのように
ふたりとも
十三だった

⁂

·ヴぃーヴ·の箱には
音叉が据えられている
膝をつく
膝が痛む
·らぐ·が
ぎっしり層をなして
積もっている
誰もかき混ぜない
腐葉土のように

「ʯゆ」強いる
立ち上がる
水が飲みたい
何枚か持っていく
持っていっていい
読む場所は
よくわからない

向きを変え
また変える

喉が渇く

鉄の長椅子に
ばあさんがひとり
革の前掛けに
厚い手袋

胸に
もがく小さな黒猫を
押さえつけている

耳を伏せ
後ろ足が
前掛けをかく

長椅子のまわりで
別の猫が三匹
なりゆきを見ている

覚えているのか
知っているのか
次は自分たちだと

素手のほうで
獣の頭をなでる

獣は震えている
最期が来たかのように

　いくら蜜を
　ささやいてやってもね

　手を受け入れやしないよ
　無理にでも
　死にはしないって
　体にわからせてやらなきゃ

猫がしゃがれた声を漏らす

筋肉がゆるむ

がくりと崩れる

ばあさんがあごをかいてやる

猫の目がまるくなる

うちの亭主も
わたしに同じことをしたよ

いやだったね

それから
ずいぶん好きになった

あずまやへの道をたずねる

ばあさんは鼻先で
小道を示す

猫は放さないまま

⁂

藍の服の男がふたり
砂利を掃いている

枝のほうきが
ふぞろいの模様を描く

ふたりは目を上げない

⁂

沸き淵に
ふらみんご

花火の桃色だ

えびを食わせないと
色が灰ざめる

三羽が群れを離れる

二羽は戻る

三羽目がひとり残る

水を見つめる

首が張りつめ
動かなくなる

と思うと
港の酔っぱらいの

意地っぱりな荒々しさで
水に映った自分に
くちばしの一撃を食らわせる

　　気持ちいいものだ
　　身のほどを
　　わからせてやるのは

⁘

あずまやの屋根は
見えているのに
入り口が見つからなかった

ふらみんごたちが
低い枝の下の
通り道を教えてくれる

あずまやといっても
堂でもなく
家でもなく
くたびれた小屋だ

畑のわきに建てる
昼寝と
道具と
雨風をしのぐための
小屋のような

低い机

書くための道具

手を温め
湯を沸かすための
小さな炉

手本の本が数冊

子どもを
退屈させない本も

窓は泉に向いている

泉は
空を
雲を

光を
もうひとつ映す

ひと間だけの小屋で
壁も
水といっしょに揺れる

「ꓘꓝ」求める

持ってきた･らぐ･に
ざっと目を通す

どれも同じ手
女の手だ

島の文字で
筆書きのものもある

墨は松やにの匂いがする

文字はあまりに細くて
鏡の中で
追いつめられたしわみたいだ

そして
この繰り返し

〉
　　･ヴぃーヴ･
　　･ヴぃーヴ･
　　･ヴぃーヴ･
〈

一つの文に
目が止まる

〉
　　泉で
　　氷のように冷たい水に
　　ひたしたあなたの両手
〈

読み直す

この光景を知っている

そのすぐあとに

〉
　　何も言わなかった
　　何も言わない
〈
手のひらを
髪の中でこする
煙の匂いがする
　　誰がおまえに書いている
このために泉は
おれを呼んだのか
　　誰かが知っている

〉∵〈

とりはなんでたまごをつくるの
　　だってじゃないとかなとこになっちゃうから
とりはなんでたまごをつくるの
　　うしだったらもーってうむから
とりはなんでたまごをつくるの
　　しかくいといたいから
·すてぃす·
ななさい

続きは本で

空に太陽があるように

ペーパーバック・Kindle 版

www.kumado.net/sora-ni-taiyo